

論文内容の要旨

申請者名 廣瀬卓哉

論文題目

作業療法における Evidence-based practice を支援する実践フレームワークの作成

本研究の目的は、作業療法の専門性に基づいた Evidence-based practice (EBP) を支援する実践フレームワークを作成することである。作業療法では、作業療法の専門性と EBP の医学的な意思決定との統合について難渋してきた経緯がある。これらの課題は、作業療法士が専門職として質の高い実践を行う上での阻害要因となっている。しかし、作業療法の専門性を EBP に統合するための具体的な指針は検討されていない。本研究は、実践フレームワークの作成のために3つの研究によって構成されている。

研究1では、作業療法における EBP の概念的基盤を明らかにした。研究法は概念分析法を用いた。データ収集は、PubMed, MEDLINE, OT seeker を用いた。スクリーニングの結果、43 編の論文が分析の対象となった。データ分析にはテーマ分析を用いた。概念分析の結果、概念の「先行因子」は(1)社会的なニーズ、(2)医学モデルとの緊張状態、「属性」は(3)作業療法の本質、(4)専門職としての技能、「帰結因子」は(5)専門性の発展に分類された。本研究によって、作業療法における EBP とは「作業中心」「クライアント中心」などの作業療法の本質を概念的な基盤としており、それらの本質に基づいてエビデンスを統合した実践であることが明らかとなった。これは、作業療法の専門性を中心として、作業療法だけでなく他領域のエビデンスを含めて柔軟に適用することの有用性を示唆した。さらに、作業療法における EBP は、医療に対する社会的なニーズや、医学モデルとのパラダイムの相違を経て発展したことが明らかになった。これらの概念の変易は、作業療法における EBP が作業療法の専門性に基づくことの重要性を示した。

研究2では、研究1の結果を踏まえて EBP を実践する際の作業療法士に求められるコンピテンシーを明らかにした。コンピテンシーとは、適切な水準で一連の実践を効率的かつ効果的に行うことを可能にする行動特性である。研究法は Structure-Constructive Qualitative Research Method (SCQRM) を採用した。データ分析では、コーディングを2つのサイクルで実施した。第1サイクルで Steps for Coding and Theorization を用いて理論記述を生成

した。第2サイクルで SCQRM の関心相関的構造構成法により、理論記述の共通性と差異性に基づいた分類を行った。研究対象者は博士号を持つ4名の作業療法士であった。対象者の所属機関は、教育機関に所属している者が3名、身体領域の臨床に従事している者が1名であった。対象者の OT 資格取得後の平均経験年数は 25.5 年であった。結果は、作業療法における EBP のコンピテンシーとして「EBP の知識とスキルの理解」「作業中心の問題点の定式化およびアウトカムの採用」「作業療法の専門性に基づく多様なエビデンスの統合」「作業療法理論の実践的な参照」が明らかとなった。これらのコンピテンシーは、作業中心の EBP を実践するためには、EBP の基本的な知識とスキルの理解を前提として、作業療法の専門的な実践にエビデンスを統合する重要性を示した。

研究3では、研究1と研究2の結果を基盤として、作業療法における EBP を支援する実践フレームワークを作成した。研究法はデルファイ法を用いた。研究対象者は博士号を持つ10名の作業療法士であった。対象者の専門領域の内訳は、身体領域5名、精神領域3名、小児領域2名であった。デルファイ法の質問項目は、研究1と研究2、先行研究の知見を統合して作成した。質問の回答には5点（完全に同意する）～1点（全く同意しない）の5段階のリッカートスケールを用いた。合意の基準は、先行研究を参考として、平均点 ≥ 3.5 、中央値 ≥ 4 、変動係数 $\leq 20\%$ 、一致率（5点または4点の回答） $\geq 70\%$ と設定した。対象者が1点もしくは2点をつけた項目については修正案を求めた。デルファイ法のラウンドは計3回実施され、全ての対象者の回答が合意の基準に到達し、作業療法における EBP の実践フレームワークが作成された。

本研究では、3つの研究によって作業療法の専門性に基づいた EBP を支援する実践フレームワークの作成という目的を達成した。本実践フレームワークは、作業療法における EBP の概念およびコンピテンシーを解明し、それらに基づいたコンセンサスをもとに作成されている。先行研究と本研究の主な相違点は、様々な専門領域に精通した作業療法士のコンセンサスに基づいて作成されたことに加えて、作業療法の専門性に立脚しつつも、一般的な EBP のプロセスを基盤としている点である。本実践フレームワークは、作業療法士が作業を中心とした EBP を推進するための指針となることが期待できる。

発表論文：

廣瀬卓哉, 寺岡睦, 京極真：作業中心の Evidence-based practice におけるコンピテンシーの質的解明. 作業療法 41(6): 686-693, 2022.

| | |
|---|--|
| 氏名 | ： 廣瀬 卓哉 |
| 学位の種類 | ： 博士 (保健学) |
| 学位記番号 | ： 甲第保 - 41号 |
| 学位授与の日付 | ： 令和6年3月22日 |
| 学位授与の要件 | ： 学位規程第4条第3項該当 (課程博士) |
| 学位論文題目 | ： 作業療法におけるEvidence-based practiceを支援する 実践フレームワークの作成 |
| 論文審査委員 | 主査： 原田 和宏 副査： 樋口 博之 副査： 中瀬 克己 |
| 審査結果の要旨 | |
| <p>本論文は、作業療法におけるEvidence-based practice (EBP) の概念およびコンピテンシーを明らかにし、それらに基づいたコンセンサスをもとに、作業療法の専門性に基づいたEBPを支援する実践フレームワークを作成することを目的としたものであった。</p> <p>本論文は3つの研究で構成された。研究1では、43編の論文を分析対象とし、概念分析法により作業療法におけるEBPの概念的基盤を明らかにした。研究2では、博士号を持つ4名の作業療法士を対象に、Structure-Constructive Qualitative Research Method を用いてEBPを実践する際の作業療法士に求められるコンピテンシーを見出した。コンピテンシーは、EBPの基本的な知識とスキルの理解を前提として、作業中心のEBPを実践するために作業療法の専門的な実践にエビデンスを統合する重要性を示した。研究3では、博士号を持つ10名の作業療法士を対象に、デルファイ法により、作業療法におけるEBPを支援する実践フレームワークを作成した。実践フレームワークは、作業療法の専門性に立脚しつつも、一般的なEBPのプロセスを基盤とし、作業療法士が作業を中心としたEBPを推進するための指針になると意義付けされた。</p> <p>本研究は作業療法の実践の在り方を主題とし、実践の正当性をより高めて確立していくために行われた研究であり、医療の質の向上につながる価値は高いと判断された。</p> <p>口頭試問では、実践フレームワークが普及していくための課題が指摘されたが、研究デザインおよびデータ解析結果から飛躍することなく、適切な研究タームを使って回答を行うことができた。また、本フレームワークで目指す作業療法実践の質の向上を検証するための臨床的アウトカムについて問われたが、研究限界を踏まえた見通しの回答ができた。</p> <p>主査ならびに副査は、本研究論文が作業療法の実践のあり方を提起し、作業を中心としたEBPの教育および臨床実践につながるものと評価した。社会的課題への探求、研究疑問の設定、仮説構築のためのデータ収集、研究限界が正確に記載され、そして研究意義は明白であることから、博士論文として「合」と判断するにふさわしいという結論に達した。</p> | |